

# キリシタン文化が息づく天草の産業

ポルトガル人宣教師のルイス・デ・アルメイダによって天草に広まったキリスト教。

それにともない、宣教師養成のために大神学校「天草コレジオ」が設立され、天草ではヨーロッパの学問が普及し、南蛮文化が華開いた。その息吹は現代もなお脈々と受け継がれている。

## 復活の平成の天草更紗 オラシヨが育む伝統工芸

およそ450年前、キリスト教伝来とともに多くの南蛮文化が日本にもたらされ、各地でさまざまな発展を遂げた。特に天草で育まれた伝統工芸は、困難な歴史を歩んだキリシタンたちのオラシヨ（祈り）と切り離すことができない。伝統が途絶えてしまったものも多いが、なかには現代人の手で復活した例もある。天草更紗はそのひとつだ。

正確な記録は残されていないが、ヨーロッパや中近東、インドなどの更紗が長崎に伝わったのは桃山時代のことだったとされている。やがてその技術を真似た職人によって、各地で固有の更紗が生み出された。天草更紗は江戸時代の寛政初期にはじめて制作されたという。ところが、技術の伝承が途絶えてしまったことも。その後、中村初



①工房「野のや」の中村さん親子②天草の文化と歴史を表現した平成の天草更紗、の柄のコースター③「野のや」の外観。2階に工房があり、1階ギャラリーに併設されたカフェは娘の野乃花さんが担当している

義氏の手で完全復活、昭和中期には熊本県の無形文化財に指定されたが、後継者がいなかったことからまたもや天草更紗は消滅してしまっただ。

そして、2002年に天草更紗は再度復活した。平成の天草更紗を染めるのは、天草市佐伊津町の工房「野のや」主宰の染色家、中村いすずさんだ。「20年前に天草更紗と出会った時、私は当時の人々が見たこともない異国の動物や花鳥の柄、鮮やかな色彩や布の美しさに心奪われた様子を想像し、不思議な魅力を感じました」と話す。郷土史家などから復元の依頼を受け、「誰かが手掛けなければ」という思いにかられて天草更紗に取り組むことを決めたという。

以来、わずかな文献資料や数少ない作品を元に文様の復元をはかり、約7年の歳月を経て天草更紗は現代に甦った。さらに中村さんは伝統を基盤とした新たな柄を創案、天草四郎や聖杯、南蛮渡来の古楽器やいちじく、ギヤマンなどをモチーフとした平成の天草更紗を生み出した。「かつて豊臣秀吉のバテレン追放令によって国外に追い出されてしまった宣教師や日本人妻子たちは、便りも禁じられた状況下で、更紗の布の裏に故郷への思いを織り込みました。私も更紗を通じて、天草の歴史と風土を物語りたい。そんな思いを胸に作っている」という。

消滅と復活を繰り返して、新たな生命を吹き込まれた天草更紗。「先人から預かったものを次の世代につないでいきたい」と語る中村さんのもとに、伝統を受け継ぐ若い人材が現れることを切に願う。

## 製作体験やお土産品に 大人気の天草土人形

天草土人形も00年代に復活した天草の伝統民芸品だ。その起

写真＝  
安藤“アン”誠起  
編集部